

Title	伊藤清司慶應義塾大学名誉教授
Sub Title	
Author	桐本, 東太(Kirimoto, Tota)
Publisher	三田史学会
Publication year	2008
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.76, No.4 (2008. 3) ,p.119(453)- 120(454)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	訃報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20080300-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

伊藤清司慶應義塾大学名誉教授

桐本東太

伊藤清司先生は、二〇〇七年六月十六日、骨髄異型性症候群にて逝去された。享年八十三歳であった。

先生の生涯と学問を振り返る時、常に想起されるのは、「学は人なり」という短い成句である。先生は篤実かつ実直な、飾らないお人柄であった。私にはそれが、先生の御研究そのものの中核に投影されているように感じられてならない。先生の学問は東アジア民族学という一つのコアを回転軸としながら、極めて多彩かつ豊饒な展開をみせた。しかしその出発点が日中の比較説話学に求められることに異存をとなえる人はあるまい。そして先生が最初に日中の比較の素材として取り上げられたのが、絵姿女房と花咲爺であったことは、到底偶然の産物とは思われないのである。絵姿女房に関しては、柳田国男から「中国にも似た話があるそうだが……」と質問を受け

たのが、そもそもこの話種の研究に着手する出発点になっていたとはいえ、絵姿女房も花咲爺も、少し愚鈍な人間でも、真面目な生活を送ってさえいれば、いつか富貴になれるというあらゆる昔話である。二つの昔話に共通する、この、正直な生活がやがて必ず報われる、というモチーフは、実は先生の、人生に対する信条そのものではなかったか。もう一つ例を挙げることを許していただきたい。先生は、中国古代における巫祝のテキストである『山海経』の研究に執拗ともいえる情熱をそそがれ、四半世紀近くにわたってその研究に没頭された。そして『山海経』から先生の手によって抽出された、中国古代村落のイメージとはまさに、山岳地帯の奥深くに分け入り、山や川から村人たちが必要とする物資を調達してくる、素朴な巫祝の姿であった。中野美代子氏がこれを評

して「明るい社会」と表現されたのは、あたっている（ただし伊藤先生は中野氏のこの表現がお気に召さなかつたようであるが……）。そもそも中国古代におけるシャーマンの社会的位置づけに関しては様々な説があるが、ここでも先生は村人たちに奉仕する誠実な巫祝を『山海経』の筆録者として想定されたのであった（いささか子細にわたるが、先生がこのような考えを修正されたのが、先生が生涯にわたって継続され続けた雲貴高原におけるフィールドワークにおいて、シャーマンによる神判に詐術の痕跡を認められてからである。神判に関する一連の論文を発表されたのち、先生は『死者の棲む樂園』と題する書籍を上梓されたが、そこでは死後の樂園を鼓吹して、貴族たちをたぶらかす古代中国のずるがしこい巫祝たちの姿が描かれている）。

それにしても、人生も定年を過ぎればとうに、研究に傾ける情熱が摩滅してしまう大学教授が少くないなか、先生は最後の最後まで自分の研究テーマとともに歩まれた。入院先の病院に机と本を持ち込み、死去される前日まで先生が執筆されていたのが炭焼長者譚の「日中比較研究」であった。先生の御研究は説話学にはじまり、その途上に様々の華麗な花を咲かせながら、最終的に説話学に

回帰したといえるであろう。

中国語には「活到老、学到老」という、亡くなる直前まで学問の研鑽を止めないことを表現する成句があるが、先生はご自分のもつとも慈しまれた国である中国の諺そのものの生涯を、学問に対するたゆまぬ探求心と、篤実な日々の生活の積み重ねによって、まっとうされた。先生のご冥福を心から祈りつつ、擱筆させていただきます。